HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	モンゴル語の後置詞について
Author(s)	山田, 洋平; Yamada, Yohei
Citation	北方言語研究, 16, 299-318
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99355
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99355
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_Yamada.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 16: 299-318（日本北方言語学会 2026）

［資料・研究ノート］

モンゴル語の後置詞について

山 田　洋 平
（東京外国語大学）

キーワード：ハルハ・モンゴル語、後置詞、助詞、コーパス、文法化

1. はじめに

本稿[1]はモンゴル語[2]文法において後置詞などと呼ばれる要素について検討するものである。モンゴル語についての文法記述では後置詞という品詞が立てられることがあるが、その扱いは研究者によりまちまちである。またそこで扱われる語の果たす機能にも雑多なものが含まれている。本稿では各種先行研究で扱われている後置詞について実際の使用例をもとにそれぞれの語の機能を記述し、典型的な後置詞とはどういうものかを検討する。こうした作業はモンゴル語の品詞論の再検討にもつながり、また独立語が文法要素としての後置詞になる文法化現象についての豊富な実例を示すことにつながる。

後置詞の例として、次の例に見られる下線部 tuxaj「について」が挙げられる。

(1) *minij tuxaj ted yuu gež yar’dag bol?*

minij	<u>tuxaj</u>	ted	yuu	ge-ž	yar’-dag=bol?
1SG.GEN	about	3PL	what	to.say.that-SIM	to.speak-HBT=Q

「私について彼らは何と言っているのだろうか」(G.Ayuurzana. Uulyn monolog. biirbeh.mn)

---

* 本研究はモンゴル国科学アカデミー言語文学研究所のプロジェクト「アルタイ諸言語対照研究（助詞)」の助成を受けて行った研究の一部である。以下、モンゴル語で記す。Энэхүү өгүүлэлд МУ-ын ШУА-ийн Хэл зохиолын хүрээлэн дээр хэрэгжүүлж буй "Алтайн хэлнүүдийн хэл зүйн харьцуулсан судалгаа (Туслах үгийн аймгийн жишээгээр)" суурь судалгааны төслийн урьдчилсан үр дүнгээс нийтлүүлж байна.

[1] 本稿は 2025 年 8 月 21 日～22 日の日程で中国内モンゴル自治区フフホト市にて開催された国際学術会議「2025 蒙古学国际学术研讨会」において筆者が行った口頭発表 “mongɢul kelen-ü daɢaburi ügen-dü ajiɢlalta kigsen ni” に基づき、大幅な加筆をしたものである。

[2] 本稿で調査対象とするモンゴル語とは、とくに断りのない限りモンゴル国で行われている書き言葉を指すものとする。これはコーパスやウェブ検索を通じて用例検索がしやすいものを選んだことによる。しかし先行研究としては内モンゴル地域で行われるモンゴル語を前提に記述したとみられるものも参照する。ここではこれらの間に大きな地域差は見られないであろうと想定して研究を行っている。

モンゴル国の書き文字は、次の通りラテン文字転写をしてこれを示す（モンゴル語の文字: ラテン文字)。a:a, б:b, в:w, г:g, д:d, e:ye/yö, ё:yo, ж:ž, з:z, и:i, й:j, к:k, л:l, м:m, н:n, o:o, ө:ö, п:p, p:r, c:s, т:t, y:u, ү:ü, ф:f, x:x, ц:c, ч:č, ш:š, ъ:’, ы:y, ь:’’, э:e, ю:yu/yü, я:ya. 大文字小文字の区別も基本的に元の文字に対応させて示すが（2 文字が対応する補助母音字の場合は語頭の文字のみ大文字)、異形態のある接尾辞の代表形を提示する場合に、母音調和などによる実現音の交替がある箇所を大文字で表現する。また動詞語幹は末尾に_(アンダーバー)を付してこれを示す。内モンゴルの書き言葉は基本的に小沢（2000）の方式によってラテン文字転写したが、文字 ǰ の代替として j を使用し、語中以外の位置に表れる子音文字の字形 ᡩ については ḍ で転写した。ハイフンは名詞の屈折接辞を示すのに用い、語末の分かち書き母音は _ (アンダーバー) で示す。

本稿全般にわたりとくに断りがなければ基本形としてモンゴル国で行われている書き言葉の語形を記す。問題としている語について、内モンゴル地域で行われている書き言葉の綴りを記す必要のある場合は ＜＞でこれを囲って示す。かつ、両者の綴りを並列して示す必要のある場合は、両者の間にコンマなどを付さず直接並べることでこれを表す。参照した文献名や人名についてはいちいち ＜＞ を付すことはしない。

上の例 (1) で tuxaj「について」の直前の語は属格形を取っており、これを後置詞による格支配であると見る向きもある。他方で直前の語が属格形を取る構造は名詞類が後続の名詞類を修飾する構造とも共通するものであり、tuxaj の直前に属格形が現れることを格支配と呼ぶことが適切なのかは問題となる。

また tuxaj の日本語訳として「について」という表現があるが、これは格助詞「に」と後続の動詞のテ形から成るものであるとみられる一方で、共時的には「に」と「ついて」は分かちがたい複合助詞を成している。モンゴル語の格接辞と後続の語の関係についても同様の分析が可能か検討する余地がある。

本稿では次節においてここで扱う「後置詞」がいかなるものか、先行研究の記述をまとめたうえで対象となる語を意味分類に基づいてリストアップする。3 節ではまず選出した後置詞についてコーパスから得られた用例等を観察し、用法の点から再分類を行う。4 節では本稿における議論をまとめ、今後の研究課題を示す。

2. 先行研究

2.1. 後置詞の特徴

後置詞とは、一般に具体的な意味を表す内容語に後続して文法的な意味を付与する、独立性の低い接置詞の一種であると言えるだろう。モンゴル語は接尾辞型の膠着言語であり、屈折接辞をはじめ多くの文法的な意味を表す要素が内容語に後続するという構造を有する。名詞類の語には複数性の意味を表す接辞、格接辞、所属接辞が後続するなどして文の成分となるが、さらに後ろに続く後置詞によって格接辞で表しきれない文法的な意味が表される。

モンゴル語で「後置詞」に直接対応するとみられる語に dagawar üg <daɢaburi üge> (lit. 接辞／後続する[3] 語) がある。この語は、オンラインで参照できるモンゴル語辞典『モンゴル語詳解辞典』(アプリ版) に次のような語釈が掲載されている (モンゴル語文はとくに断りのない限り筆者が日本語に訳して提示する。以下同様)。

> 語構成の外部にある後続要素で、文中で語に後続し、時間、位置、目的、理由、比較、概数、限界、収集、関連、強調といった文法的な意味の付加を意味する抽象的な語

そこではこの要素が接辞などではない「語構成の外部にある後続要素」であることが明記されている。これ以外の記述では概ね後置詞が独立語であるとの前提に立って取り扱われている。独立語として品詞論上は不変化詞類[4]の一部とされ、「屈折しない」ことが特徴とされる (kele bičig sudulqu ɢajar 2005[5]: 543-552, yuwan čou ba ɢalsang (eds.) 2012)。一方で

[3] dagawar という語は、daga_「従う」という動詞語根から派生したもので、「従う (もの)／後続の」という意味を表す。単独で文法用語として用いられると「派生接辞」を表す (cf. Bat-Ireedüj 2014: 63)。

[4] 動詞接辞を伴って屈折する動詞と、それ以外の数・格・所属といった接辞を伴って屈折しうる名詞類に次ぐ第三の品詞として、屈折しない語という意味合いで不変化詞類が立てられる。概ね同じ概念を指す伝統的な用語として、具体的な意味を有さないという意味合いの虚詞 (sul üg<sula üge> を訳したもの) や助詞 (tuslax üg<tusalaqu üge>) も用いられている。本稿では形態的特徴が分かりやすい訳語として不変化詞類という用語に統一して用いることとする。

[5] 正確な書誌情報は öbür mongɢul-un yeke surɢaɢuli-yin mongɢul sudulul-un degedü surɢaɢuli-yin mongɢul kele

Luwsanwandan (1966:213) や yuwan čou ba ɢalsang (eds.) (2012) のように後置詞が格などによって屈折しうることについて言及するものもある。

形態面ではこの他に後置詞の語構成として本来的な後置詞と派生的な後置詞が区別されることに言及するものがある。Zeenyambuu ba Bazarragčaa (2014:88) は言語一般に本来的な後置詞は少なく、独立語が文法化して成った後置詞 (派生的な後置詞) の方が多いとしている。Kullmann and Tserenpil (2015: 283-284) は本来的な後置詞と「後置詞的な用法の副詞・形容詞」を区別している。

統語面では、後置詞は単独で文の成分にならず、必ず先行する語を伴って文の成分になる (kele bičig sudulqu ɢajar 2005, yuwan čou ba ɢalsang (eds.) 2012)。yuwan čou ba ɢalsang (eds.) (2012) は後置詞について「文中でいろいろな成分になりうるが、主として副詞的修飾成分、名詞修飾成分、目的語成分になる」としている。

また後置詞は先行する名詞に格形式を要求することも知られている。向井 (2006) は後置詞を先行する語が取る格形式によって分類しており、これによると後置詞は主格、属格、与位格、奪格、共同格といった格形式を要求しうる。なお、ここでいう主格には 2 つの形式が含まれる。1 つは語が格接辞を伴わずに文中で主語や列挙される語として用いられる場合の形で、主格と呼ばれる典型的な形である。もう 1 つはいわゆる「不安定な n」[6]を語末に有する語形で、向井 (2006) は後置詞が要求する形式としてこれらを区別して扱っている。

意味の面で、後置詞は具体的な意味を有さず文法的な意味を成すとされる (cf. kele bičig sudulqu ɢajar 2005: 543, yuwan čou ba ɢalsang (eds.) 2012: 159 etc.)。ここで「文法的な意味」とは何かについては、あまり明示的な説明がされていない。それぞれの先行研究が大まかな意味分類を提案することによって、文法的な意味の具体的な内実が提示されていると言える。この詳細は次節で実際に後置詞を意味分類する中で改めて紹介する。

「文法的な意味」に関係のある説明として、後置詞には文中の成分同士の関係を表すものであるとする説明が見られる (Luwsanwandan 1966, Zeenyambuu ba Bazarragčaa 2014:87)。それゆえに Luwsanwandan (1966) は後置詞を削除しえない要素、すなわち後置詞を削除すると文が成立しなくなると述べている。

以上、先行研究で指摘されてきた後置詞の特徴を (2) に整理する。

---

bičig sudulqu ɢajar 2005 であるが、以下では紙幅の都合上、煩を避け kele bičig sudulqu ɢajar 2005 とする。

[6] 向井 (2006) は「N 交代語幹」と呼び、またモンゴル語学の伝統では「隠れた n」などと呼ばれる形式・要素・現象を指す。一部の名詞類の語には、通時的あるいは類推などの要因で「不安定な n」を有する語幹がある。これを有する語幹は、複数接辞 -UUd、属格・奪格・与位格接辞が付されるときや後続の名詞と複合表現を成す場合に、その語幹末に子音 n が現れる。基本的にこの子音のことを「不安定な n」と呼ぶ。ここで扱うモンゴル語において、格接辞なしに語が文中の主語となる際に「不安定な n」が語幹末に表れることはないが、伝統的には、あるいは通時的な変化を鑑みて、「不安定な n」が語幹末に表れた形式も主格と呼んだり、あるいはこの末尾の n をも含めて語幹と見なしたりする向きもある。本稿では「不安定な n」の形態論上のステータスについて議論することを保留する意味合いから、形態素としては接辞同様に -n と分析しつつ、単に n (unstable n) というグロスを振るにとどめる。

本稿では語幹であるとの判断を保留するために「N 交代語幹」という用語を避けた。また伝統的な「隠れた n」はおそらく子音 n の顕現した語形をデフォルトであるとみる通時的な視点に寄るものであるためこれを避けた。「不安定な n」は yuwan čou ba ɢalsang (eds.)(2012: 64) などによる togtworgüj n<toɢtaburi ügei n>「lit. 安定しない n」に基づき、「語幹の形態が変わる」という特徴をとらえたものと思われるが、「出現するか否かがそもそも不安定である」ことも表しうるものとして利用した。

(2) 先行研究における後置詞の特徴

① 本来的な後置詞と、二次的な後置詞がある

② 基本的に屈折しないが、いくつかの格接辞を付すことが可能な場合もある

③ 先行する語に何らかの格形式を要求する

④ 先行する語を伴った後置詞句は副詞的な修飾成分になったり名詞修飾をしたり目的語成分になったりする

⑤ 先行する語は単独では文中の成分になれず、後置詞を欠いては意味を成せない

⑥ 文中で各種の文法的な意味を成す

上記のまとめには次のような点で一部注意を要する。①の二次的な後置詞について、「後置詞を派生する接辞」があるわけではなく[7]、あくまで他の語や語＋接辞が慣用表現化して後置詞になるケースがあることを指しているとみられる。③要求される「何らかの格形式」には格接辞を付さない裸の形式 (≒主格形、注 6 も参照のこと) も含まれる。④ここでいう目的語成分が、典型的な他動詞の取る直接目的語項のようなものを指すのかは不明確である。⑤が⑥でいう文法的な意味に該当するのかは不明である。

後置詞との関連で補足すべき事項として、モンゴル語学においては本稿 (とくに次節 2.2.) で扱う後置詞を「接続詞 (xolbox üg)」「従属接続詞 (ugsruulan xolbox üg)」という呼称で分類する先行研究もあるという点が挙げられる (例えばモンゴル語学用語辞典である Bat-Ireedüj (2014) では dagawar üg「後置詞」という語を調べると ugsruulax xolbox üg「従属接続詞」を見よと書いてある)。そこでは不変化詞類を他の文や成分との関係を表すか否かで二分し、関係を表すものを広く接続詞と呼ぶ。接続詞は等位と従属、文同士の関係を表すものと成分同士の関係を表すものとに分類される。モンゴル語では句、節、文の境が分明でないことから、実際に次節で見るように「後置詞」なのか「接続詞」なのか区別しがたい語が生じるのであろう。以下では、この従属接続詞のうち文中の成分同士の関係を表すものも後置詞として扱っていく。

2.2. 本稿で扱う後置詞とその分類

2.2.1. 概要

本節では本稿で扱う後置詞の全体像を示す。後置詞とは何かを明らかにするために、まず先行研究で後置詞として例示されているものを全て列挙し、これを次節で分析するという手順を踏む。筆者が探した限りではモンゴル語の後置詞について専門的に扱った研究論文は見つけられなかった[8]が、モンゴル語の参照文法や文法用語を解説する辞書を参照すると

[7] Luwsanwandan (1966: 220-221) は後置詞を成す接辞 (-tAl, -tUgAj, -m, -UU, -Uj) を取り上げているが、いずれも接辞の機能によって後置詞が派生されている例ではないと考える。ある種の動詞形や出動名詞派生語などの一部が文法化のプロセスを経て後置詞的な用法を獲得したものであると見る。ただし-m は本稿で扱う語のうち xožim, šaxam, orčim, ergem, tusam, ül baram (, 対応する動詞語根は見つからないが tutam も?) に含まれており、「後置詞によく見られる派生接辞」であると言える。派生接辞に関する研究である塩谷 (2007: 90) は出動名詞接尾辞として -m を取り上げ、これを構成要素としてもつ後置詞 (や副詞) があることに言及している。

[8] モンゴル語の後置詞に関する研究として梅谷 (2010) があることを査読者の方にご指摘いただいた。梅谷

後置詞についての記載が見られる。

先行研究として参照した文献を次の表 1 に整理する。表中 a の行はその研究がモンゴル国のモンゴル語を対象としていると思われる場合に空欄、内モンゴル地域のモンゴル語を対象としている場合には「内」と記載した。現時点では両者の間の言語差は不明である。b は文献の性質としてモンゴル語文法の全体像を記載したものを「参照文法」、モンゴル語学用語の解説を載せたものを「用語辞典」であると示した。c は意味分類の有無、d は扱われている後置詞の数を表す。

表 1. 参照した文献一覧

番号	文献	ページ	a	b	c	d
1	Luwsanwandan (ed.)(1966)	212-224		参照文法	○	11
2	清格尔泰 (1991)	435-443	内	参照文法	○	37
3	sečen ba bolu (eds.)(1996)	623-625	内	用語辞典	○	36
4	mongɢul kele bičig sudulqu ɢajar (2005)	543-552	内	参照文法	○	42
5	向井 (2006)	[9]		参照文法		63
6	Önörbayan ba Žumdaan (2010)	179-181		参照文法		28
7	yuwan čou ba ɢalsang (eds.)(2012)	159-162	内	用語辞典	○	44
8	Zeenyambuu ba Bazarragčaa (2014)	87-88		用語辞典		37
9	Kullmann and Tserenpil (2015)	282-296		参照文法		43[10]

次節では表 1 の文献に掲載の後置詞を位置、時間、数量、目的・理由、その他という 5 つに意味分類して表 3~7 で提示する。この分類は上記の諸文献の記載を参考に作成した。それぞれの文献がどのような意味分類をしているかについては次節で個別に述べる。

それぞれの表は次のような構成になっている (次ページ表 2)。モンゴル語の行で後置詞の語形を挙げ、日本語訳の行にその訳語を並べた。訳語は基本的に向井 (2006) によるものを利用した。向井 (2006) の後置詞一覧に掲載のないものについては網掛けを付した上で、小沢 (2000) の語釈を利用[11]、小沢 (2000) にも掲載がない場合はモンゴル語辞典 *Mongol xelnij ix tajlbar tol'* を利用し筆者が仮訳を付した。この仮訳には ( ) (丸括弧) を付した。各セルは意味が近いものを筆者の判断でグルーピングしたものである。

表中の「支配」とは向井 (2006)、Kullmann and Tserenpil (2015) に基づいて先行する名詞

(2010) は Kullmann and Tserenpil (2015) (の初版、1996) における「直前の名詞が語幹で現れる「後置詞」」を対象として、格接辞との形態的特徴の違いを論じたものである。例えば šig と met について本稿表 12 や (8)c では同じ分類に帰したが、梅谷 (2010) は先行する名詞とこれらの要素の間に =l, =č が挿入可能かどうか検討し、šig はこれらが挿入不可である点で直前の名詞との結びつきが met よりも強いとしている。

[9] 「後置詞」(https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn/gmod/contents/explanation/028.html)

[10] 45 項目挙げられているが、このうち 2 つは -UUr, -gš という接辞であるためここでは除外した。

[11] 小沢 (2000) には「後置詞」という品詞情報が掲載されていることもあり、このとき語釈には「…に沿って」の「…」のような先行する語があることを想定した表現が用いられることもあるが、そもそもこの品詞情報は分類基準が不明である。ここではこうした後置詞らしい語釈があればこれを採用した。なお、小沢 (2000) は句読点に「, .」を用いるがこれらを「、」に統一し、「; :」はそのまま利用した。

に要求する格形式を記す。「分類」の欄には Kullmann and Tserenpil (2015) が本来的後置詞としたものは「本来」、後置詞として用いられる副詞、形容詞としたものについてはそれぞれ「副詞」「形容」と記載した。先行研究の欄では表 1 でみた文献番号を用いて、どの文献に掲載されていたかを記した。例えば .2345..89 は文献番号 2, 3, 4, 5, 8, 9 に掲載されていたが、1, 6, 7 には掲載されていなかったことを表す。

表 2. 後置詞の一覧サンプル

モンゴル語	日本語訳	格支配	分類	先行研究
daguu<daɢau/daɢaɢu>[12] gudas<ɢudus>	に基づいて、に沿って …に沿って	属格	本来	.2345..89 ...4.....

2.2.2. 位置の後置詞

◇分類と成員

文献 1, 4, 7 で位置 (oron<orun>) に分類される語と、意味が近いものを表 3 に分類した。文献 3 では方向と位置 (<jüg orun>)、文献 2 (清格尔泰 (1991)) では時間と位置 (<čaɢ orun>) としている。

表 3 に示す語のうち、モンゴル語部分に網掛けを付したのは「北」「南」「うしろ」「前」「上」「下」などの位置関係を含む位置語[13]という語類である。これを清格尔泰 (1991) は品詞分類上区別していて後置詞に含めていないが、他の文献では後置詞として扱うものが多い。Kullmann and Tserenpil (2015) はこれらを「後置詞として用いられる副詞・形容詞」として扱っている。Kullmann and Tserenpil (2015) は語形に -š<-(g)si> や -UUr<-GUr> を含むものについても「後置詞的に用いられる副詞・形容詞」としていることから、表中ではこれに「副詞」「形容」の分類を付した。これらの語のうち表 3 最下部のセルにまとめた 5 つの語は文献 4 でしか扱われておらず、かつ類似の語形が他に掲載されていることから、表 3 では煩雑になることを避けてまとめて示すのみに留めた。

なお、これらの語は意味として位置も時間も表しうるものも含まれるが、まず基本的に先行研究の分類に従った。位置の意味も時間の意味も表しうるものについては、位置の意味が本来的な意味で、時間の意味は派生的な意味である (cf. Lakoff and Johnson 1980) と考え、位置の後置詞に含めた。表 3 では時間の意味も表しうるものに /時/ というタグを付す。

この表 3 に含まれる語は多いが、このうち多くの文献に掲載されているのは daguu<daɢau/daɢaɢu>「に基づいて、に沿って」(6 件) である。これに次いで 4 つの文献で扱われているのは ööd<ögede>「を伝って上へ」, uruu<uruɢu>「を伝って下へ」, xojno<qoyin_a>「の北側に、のうしろに」, ömnö<emün_e>「の南側に (他)」である。ööd<ögede>「を伝って上へ」, uruu<uruɢu>「を伝って下へ」については文法化が進み、-AAd, -RUU といった格接辞として使用されている。

[12] <> 内にスラッシュ付きで複数の綴りが記されている場合、対応する綴りに揺れがあることを示す。

[13] おおよそ清格尔泰 (1991) における「時位詞」に当たる。

◇格支配

格支配の欄に「n/属格」とあるのは「不安定な n」[14]または「属格」のいずれかを選択するということを意味する。こうした要求をするのは、本稿で扱う語のうちここで扱う deer<deger_e>, door<dour_a>, dotor<dotur_a> とその語根を共有する一部の語のみである。

表 3. 位置の後置詞 (39 語)

モンゴル語	日本語訳	格支配	分類	先行研究
daguu<daɢau/daɢaɢu>	に基づいて、に沿って	属格	本来	.2345..89
gudas<ɢudus>	…に沿って			...4.....
ööd<ögede>	を伝って上へ	属格	副詞	..3.5..89
uruu<uruɢu>	を伝って下へ	属格	副詞	..3.5..89
tijš<tesi/teyisi>	…の方に		副詞	.23……
züg<jüg>	方向、方角、方面			…….8.
daxin<ďakin/dakin>	…にある、全て			..3..6…
derged<dergede>	の傍らに、に付属して	属格	本来	..3.5…9
biye<bey_e>	側			…4..7..
zax<jaq_a>	縁、端、はずれ			…4..7..
tal<tal_a>	側			…4..7..
xojno<qoyin_a>	の北側に、のうしろに /時/	属/奪格	副詞	….5.789
ard<aru-du>	の北側に、のうしろに	属格	副詞	….5…9
ömnö<emün_e>	の南側に、* /時/	属格	副詞	….5.789
urd<urdu>	の南側に、の前に	属格	副詞	….5…9
deegüür<degegür>	…の上を、…の表面を		副詞	..34..…
deer<deger_e>	の上に、**	n/属格	副詞	…45…9
deeš<degegsi>	より上に、以上の	奪格	副詞	….5…9
door/dor<dour_a>	の下に、のもとに	n/属格	副詞	…45…9
dotor<dotur_a>	の中で、の中へ	n/属格	副詞	…45…9
dund<dumda>	の間に /時/	属格	形容	…45…9
gadaa<ɢadaɢ_a>	の外で	属格		….5….
naana<naɢan_a>	の手前に、以前に /時/	属格	副詞	…45…9
caana<čaɢan_a>	の向こうに /時/	属格	副詞	…45…9
xoorond<qoɢurundu>	の間に /時/	属格	本来	….5..89
xažuu<qajaɢu>	の脇に	属格		….5….
xažuud<qajaɢu-du>	(の脇に)		本来	……..9
xažuugaar<qajaɢu-bar>	の脇を、のかたわら	属格		….5….
ojr<oyir_a>	の近くに、の近くの	与位格	形容	….5…9
ojrxon<oyiraqan>	の近くに、の近くの	与位格		….5….

[14] 「不安定な n」を有する語は語幹末尾に n が現れ、有さない語は n の現れない語形になる。

ojrolcoo<oyiralčaɢ_a>	近い、近隣の		形容	……..9
xaw'caa<qabičaɢ_a>	近隣〔に〕、近所〔に〕			…..6…
xol<qola>	から遠くに	奪格	形容	….5…9
xolgüj<qola ügei>	から遠くなく、から遠くない	奪格		….5….
gaduur<ɢadaɢur>, dotuur<dotuɢur>, naaguur<naɢaɢur>, caaguur<čaɢaɢur>, dooguur<douɢur> ***			副詞	...4....9

*の南側に、の前に (空間的・抽象的)、の直前に、前に
**の上に、の表面に、で／に、のところで／に、のところに (空間的帰着点)、に加えて
***「…の外に、…の外面を ; 外に、近くに : 外側の」「中の、内の ; 中に」「こちら側を (で)」「向こう〔の、へ〕、…の向こうへ (に)」「下に、下へ ; …の下を、…の下に」

2.2.3. 時間の後置詞

後置詞の意味分類で「時間」は全ての先行研究で立てられているが、このうち位置の意味をも表すものについては前節表 3 で挙げたので、ここではこれに属さないもののみを挙げた (表 4)。前節で位置語と呼ぶべき語が位置の後置詞に含まれていることを示したが、位置語のうち語末に -š を含むものの一部は時間の後置詞に挙げられている。これらは直前の語に奪格を要求する。また基本的に位置・時間のいずれの意味も表すものは表 3 にまとめたが、ömnö<emün_e> という語については表 4 でも再掲した。これは向井 (2006) で要求する格が異なると意味も異なるという形で記載されていたことを反映させたものである。この他、duusan<daɢusun> に語形の似る <daɢus> という語が文献 2 に掲載されていたが辞書などでは見いだせなかったため、ここでは表に含めなかった。

表 4. 時間の後置詞 (11 語)

モンゴル語	日本語訳	支配	分類	先行研究
turš<tursi>	の間ずっと、に沿って	属格	本来	123456789
turšid<tursida>	沿って*			.23.....
dül<düli>	…を通して、…を徹して、…の間			..34..7..
duusan<daɢusun>	…の間、…中			.2.4…..
zuur<jaɢur_a>	…する時 (間・中) に			..34..78.
xožim<qojim>	後で、後に			……7..
xojš<qoyisi>	のあとで	奪格	副詞	….5.7.9
daraa<daraɢ_a>	のあとで、後に・ぶりに	属格	副詞	…45.7.9
ömnö<emün_e>	の前に	奪格	副詞	….5.789
naaš<naɢasi/nasi/inaɢsi>	以前に、以内に	奪格	副詞	….5.7.9
caaš<čaɢasi>	以降に	奪格		…45….

2.2.4. 数量の後置詞

数量を表す、あるいは先行する語として数詞や数量を表す語を取る語がここに含まれる。先行研究における分類は多様で、文献 3, 4, 7 では概数 (<toyimu>), 収集 (<qoriyaqu>, 「毎

～」の意味を表すもの), 限界 (<kijaɢarlaqu>, 「～まで」の意味を表すもの) を区別している。文献 1 では xürtel「まで」を位置の後置詞として紹介しているし、文献 2 ではこの 3 つを区別せず数と範囲 (<toɢ_a ba kebčiy_e>) としてまとめている。文献 4 では収集というグループに tutam<tutum>, tusam<tusum>「毎～」「…ごとに」や yosoor<yosuɢar>「のとおりに」も含めているが、前者について文献 2, 7 は促進 (<dabsiɢulqu>) と名付けている。ここではこれを数量の後置詞に分類しておく。後者については表 7 の対象に分類する。

表 5. 数量の後置詞 (18 語)

モンゴル語	日本語訳	支配	分類	先行研究
garui<ɢarui>	あまり、あまりの	主格	本来	123456789
ilüü<ilegüü>	より多くの、を超える	奪格	形容	.2..5…9
šaxam<siqam>	近く、近くの	主格	本来	123456789
šaxuu<siqaɢu>	…に近い (く)、約…			.2…….
orčim<orčim>	ぐらい、ぐらいの	主格	本来	..3.567.9
ergem<ergim_e>	ぐらい、ぐらいの			…..6…
tušaa<tusiy_a>	～のまわりに；…位、約…			…..6…
bolgon<bolɢan>	毎～、すべての	主格	本来	.2345.7.9
bür<büri>	毎～、すべての	主格	本来	.23456789
negbür<nigebüri>	各々の、あらゆる			.2….7..
tutam<tutum>	毎～	主格	本来	.2.456789
tusam<tusum>	…するたびに、…ごとに；…につれて			.2.4..78.
boltol<boltal_a>	まで	主格		.23.5.7..
xürtel<kürtel_e>	まで	主格	本来	123.56789
tultal<tultal_a>	(まで)			..3…7..
gexed<gekü-dü>	までに	主格	本来	….5…9
udaa<udaɢ_a>	度、回、～の次に、あとで			…..6…
zereg<jirge>	と同時に	共同格		..345.78.

2.2.5. 理由と目的の後置詞

文献 2 では「理由と目的」、文献 1, 3, 4, 7 では「理由」と「目的」を分けるという違いはあるが、皆この分類を設けている点で共通している。

表 6. 理由と目的の後置詞 (10 語)

モンゴル語	日本語訳	支配	分類	先行研究
tölöö<tölüge>	のために、のための、の代わりに	属格	本来	.23456789
tölöönöö<tölügen_e>	代わりに			.2.....
tul<tula>	を目的に			12345678.
tuld<tulada>	を目的に	属格	本来	12345.7.9

boloxoor<bolqur>	(なので)			.234..7..
učir<učir>	…の故に、…なので；…というのは			…….8.
učraas<učir-ača>	(なので)			.234..7..
ulmaas<ulm_a-ača>	…の結果、…の理由で、…のために			.234.67..
xaraagaar<qaraɢ_a-bar>	(なので)			.234.67..
bolž<bolju>	のせいで	奪格		....5....

2.2.6. その他の後置詞

本節では上記の分類に入らない小さなグループをまとめて表 7 に示す。

文献 1,2,3,4,7 では「のように」「と同じように」のような意味に対して同一 (adiltgax<adalidɢal>) という分類を設けている。ただし 2 においては yosoor<yosuɢar>「のとおりに」という語もこのグループに含めている。この語は文献 3 では tuxaj<tuqai> とともに関係付け (<qamiyataɢulqu>) というグループに入れているが、上述の通り文献 3 では収集に入れている。文献 7 は順守 (<jirumlaqu>) と名付けている。

tuxaj<tuqai>「について」は文献 3, 7 で関係付けとされているが、文献 2, 4 では対象[15]とされている。文献 2 は bol<bol> もこの対象に含めている。

表 7. その他の後置詞

モンゴル語	日本語訳	支配	分類	先行研究
met<metü>	のように、のような	主格	本来	123456789
šig<siɢ/sig>	…のように (な)、…の如き (く)		本来	123456789
činee<činege>	と同じぐらい、と同じ大きさの	属格	本来	.23456789
adil<adali>	と同じように、と同じような	主/属/共同	形容	.23.56789
adilxan<adaliqan>	と同じように、と同じような	主/属/共同		….5….
sacuu<sačaɢu>	等しい、平等な// 同様に			…….8.
öörgüj<öger_e ügei>	どちらでも同じことだ、どうでもよい；同一な			.23…7.9
xir<kiri>	程度、分；ほとんど、ぐらい；いかに、どれほど			.2…….
yosoor<yosuɢar>	のとおりに	主格	本来	.2345.789
tuxaj<tuqai>	について、についての	属格	本来	.23456789
talaar<tal_a-bar>	について	属格	本来	….56.89
xuw'd<qubi-du>	にとっては、については	属格		….5….
esreg<esergü>	に反対して、への対策に、反～の、抗～の	属格	形容	….5..89

[15] 文献 2 では漢語 (いわゆる中国語のこと、以下同様) で「対象」とされていたのに対し、モンゴル語で書かれた文献 7 では düi siyang という上記漢語表現 (ピンイン表記 duì xiàng) をそのまま借用したような用語が用いられていた。

öör<öger_e>	以外の	奪格	形容	….5…9
gadna<ɢadan_a>	以外に	奪格	形容	….5…9
busad<busud>	…の他に、…以外に	奪格	形容	……..9
ül baram	…ばかりでもなく、…も			1……8.
bajtugaj<bayituɢai>	…のみならず、…は勿論のこと			1……8.
gex met<gekü metü>	(…など)			…….8.
xamt<qamtu>	共に、…と同時に、…と共に			…….8.
bol<bol>	…は、…が、…ならば			.2…….

2.3. 先行研究の問題点と本稿の立場

2.1. では「後置詞とは何か」について各先行研究の記述を見た。2.2. では各種先行研究で挙げられた後置詞の例を列挙することで、本稿で検討すべき後置詞の候補を概観した。

先行研究では、後置詞という品詞を不変化詞類の一部として立てつつも、これを立てなければならない根拠については明確にしていない。向井 (2006) などのように、明言しておらずともモンゴル語学習者への便を図って後置詞という品詞を立てていることが明らかな場合もある。

また各種先行研究では、それぞれ後置詞に該当する語を例示している。多くの (ここでは 5 つ以上の) 先行研究が共通して後置詞として認める語として daguu (表 3), turš (表 4), garuj, šaxam, orčim, bolgon, bür, tutam, xürtel, zereg (表 5), tölöö, tul, tuld, ulmaas, xaraagaar (表 6), met, šig, činee, adil, yosoor, tuxaj (表 7) がある一方、一部の先行研究でしか扱われていない語も多数ある。一部の先行研究でしか扱われない語は、単に紙幅の都合で割愛されただけなのか、それとも後置詞という品詞に関する立場の違いの表れなのか不明である。

本稿では従来の研究で後置詞とされた形式がどのようなものであるか明らかにするために、次の (3) に示す方針で記述的に再整理する。

(3) A. 相互排他的な品詞分類

「後置詞」としか分類しえないのかどうかを明らかにする。

具体的には、他の品詞[16]としても用いられうるもの、他の品詞の機能をも有するもの、名詞類や動詞の屈折形式からなるものと、これらに該当しないものを区別する。

B. 後置詞としての機能

不変化詞は、独立性の高いものと低いものに二分される。独立性の低い語としては、後置詞の他に助詞、接続詞[17]があり、これらも「後ろに置かれる」という性質を共有

[16] ここでは形容詞や副詞といった品詞を想定しているが、そもそもこれらの品詞分類に確固たる定義があるわけではない。本稿では B. で見るように独立性の低さを後置詞の特徴ととらえており、単に独立語として用いられるものを念頭に「他の品詞」としている。直前に名詞を従えていても副詞などと呼びうるかが問題となるが、副詞的修飾表現が直前の語による修飾を受けるケースはある (ex. öčigdrijn öglöö「昨日の朝」)。この点は C. における後置詞が直前の語を支配していると言えるかどうかを考慮してさらなる検討を要する。

[17] 清格尔泰 (1991) の用語ではそれぞれ語気詞、連接詞 (语气词，连接词) とされるものを参考として仮に立てた品詞である。清格尔泰 (1991: 443-465) がまとめる語気詞は雑多なものが含まれており、概略本稿で

する。本稿では (2) ⑤を鑑み後置詞とは「欠いては意味を成せない」ものであるとし、この性質を有さないものを助詞であると考える。接続詞は後置詞と区別しにくいが、この点については 3.5. で見ることとする。

C. 先行する語の支配

後置詞は先行する語に格形式を要求するとされる。表 3〜7 では属格を要求するものが多いが、これは名詞による名詞修飾の構造と同じであり、後置詞が先行する語を支配していると言えるのかどうかが問題となる。また、主格形または「不安定な n」を要求する構造について、風間 (2022: 147) のように「後置詞に近い性質を示している」[18] とする立場もある。

3. 用法・機能からの再分類

3.1. 分析の方法

2.2. で見た後置詞を、再度 (3) で示した観点から分類して表示していく。

先行研究の記載を参考にしつつ、コーパスで当該の語を検索してその用例を観察することで Kullmann and Tserenpil (2015) が行ったような類別を行い、表に整理する。表は 2.2. で見た分類に基づき、それぞれ要求する格形式×後置詞が本来的な後置詞であるか否かを一覧できるように務めた。

コーパスとしては Sketch Engine 上に公開されている CEFR-Jx28-Mongolian (総トークン数 8,407,629) を用いる。コンコーダンスでそれぞれの後置詞を検索し、得られた例文を観察し、また必要に応じて直前に高頻度で現れる語を調べ、後置詞として用いられているかどうかや、用いられている場合に直前の語に要求する格形式について確認した。

要求する格については主格、属、その他の格の順になるよう配置した。

後置詞に先行する形式のうち格接辞を取らないものには、次のようなものが含まれる点で注意を要する。典型的な名詞が後続の名詞を修飾する場合に取る形式として、属格形の他に不安定な n がある。これについて表中では n として区別して示した。また名詞類の中でも形容詞的や、動詞の形動詞形は、接辞無しに後続の語を修飾することが可能である。位置語の一部も後続の名詞を修飾可能である。ここでは、これらについても一括して主格とした。

表の横軸では「本来的後置詞」「本来的派生後置詞」「後置詞的用法」の 3 分類を設けた。独立性が低く、後置詞としての用法しかないものを「本来的後置詞」、独立性が高く、単独

は語気詞から独立性の高いとみられる語や「後ろに置かれる」わけでないものを除外したものを助詞と呼ぶ。接続詞についても、清格尔泰 (1991: 465-475) の連接詞に含まれる接続表現 (屈折接辞や助詞を含むもの) や動詞屈折形式が含まれるが、これらを除いたものを指す。

なお、助詞のうちもっぱら主節の述部 (あるいは述部の後ろで命題の外側) に現れるものは終助詞としてここでは除外した。これも「後ろに置かれる」特徴を共有するが、モンゴル語の修飾語-被修飾語といった主要部後置型の言語であることを考慮すると、(2)の④でみた「修飾成分」や「目的語成分」になる機能になり得ないことから後置詞とは明確に区別されるためである。

[18] 風間 (2022: 147) はモンゴル語の deer「の上に」, door「の下に」という語が「無語尾の名詞を支配する」(≒主格を要求する) ことに関してこのように述べている。

なお、典型的な名詞が名詞を修飾するように見える構造にも属格形が現れないこともあるが、これは語彙的な操作で固定の複合表現に限られる。本稿で見る支配関係では、少なくとも先行する語の選択がある程度自由である点で複合表現とは区別される。

でも用いうるものを (副詞や形容詞の)「後置詞的用法」とした。また本来的後置詞の中でも、他の語から派生して成ったと思われる語については本来的派生後置詞として区別して示した。

3.2. 位置の後置詞の再分類

位置の後置詞を上記の基準によって再分類したのが表 8 である。多くが位置語に属する語の後置詞的な用法であり、本来的な後置詞は数が限られることが分かる。

表 8. 位置の後置詞の再分類

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格		daxin	tijš
主/属格	ööd, uruu		
n/属格			deegüür, deer, door, dotor
属格	derged	daguu, xaw'caa	züg, tal, ard, ömnö, urd, dund, gadaa, naana, caana, xoorond, xažuu, xažuud, xažuugaar, ojrolcoo
属/奪格			xojno
属/奪/与位格			deeš, xol, xolgüj
与位格			ojr, ojrxon

※出現頻度の低いもの、コーパスからうまく用例を抽出できなかった語として gudas, biye, zax は調査から除外した。なお、gudas は zam gudas「道に沿って」という用例が得られた。

本来的後置詞である ööd, uruu は属格を要求するものと記述されているが、用例を検索すると主格形の名詞を伴う例も見られる。これらの語が格接辞 -AAd, -RUU へと文法化する途上にあることの現れであろう。

派生後置詞として daxin は場所修飾語「～での」を作る要素から派生するもので、またこれは遡ると与位格 (「～で」) に由来するものである。検索結果からは daxin と同音異義の「再び」「～倍の」という意味の語が得られるが、位置の意味合いを表す例で先行する語として delxij「世界」, dorno「東」といった語が見られた。また daguu は daga_「従う」という語に由来するものである。

後置詞的用法で用いられる語として tijš は主格形の語を要求するが、先行するのは位置語がほとんどであり、他に gar「手」＝「(左右などの)方向」といった方向を表す語があるのみである。こうした先行する語に偏りがある場合、これらは固定の複合表現と呼ぶべきもので、文法要素としての汎用性が低いものと判断できる。位置語は他に züg「方向」, tal「側」などにも格接辞無しで付されうる。

先行する語に不安定な n または属格形を取る deer「の上に」, door「の下に」, dotor「の中に」は、位置語の中でもとくに本来の意味が希薄化し文法化の進んだものである。

奪格や与位格の形式を要求する語については、形容詞 xol「遠い」, ojr「近い」などが含

まれる。これらについては基準点を表す格成分として奪格項や与位格項が現れうるもので、後置詞としての格の要求であるとは言い難い。次の例は格形式を取る語と当該の語の間には他の成分を挟むことができ、また当該の語を修飾することも可能であることを示すもので、当該の語が独立語であることが見て取れるが、これについて後置詞的用法と区別する根拠は十分に見いだせないように思われる。

(4) *narny ajmgijn garguud narnaas xer xol zajd oršdog we?*

nar-n-y	ajmg-ijn	garg-uud	nar-n-aas	xer	xol	zaj-d
sun-n-GEN	group-GEN	planet-PL	sun-n-ABL	how.much	far	distance-DAT

orš-dog=we?
to.exist-HBT=Q
「太陽系の惑星は太陽からどれくらい遠い距離に存在するか」(CEFR-Jx28-Mongolian)

deeš という語についても同様に、先行する語との間に他の修飾語要素を挿入することが可能である。

(5) *bömbögijg 24m öndröös egc deeš šidžee.*

bömbög-ijg	24m	öndr-öös	egc	deeš	šid-žee
ball-ACC	24m	hight-ABL	direct	up	to.throw-PST

「球を 24 メートルの高さから真上に投げた」(CEFR-Jx28-Mongolian)

これらの事実は、奪格やその他の格を要求するとされた後置詞について、名詞の格形式を支配しているわけでもなく、後置詞としてというよりは本来の形容詞・副詞として機能しているだけの語であることを示唆している。

3.3. 時間の後置詞の再分類

次いで時間の後置詞について次の表 9 で再分類を試みる。

表 9. 時間の後置詞の再分類

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格/属格			zuur
属格	turš	turšid	daraa
属/奪格			ömnö
奪格			xojno, naaš, caaš

※出現頻度の低いもの、コーパスからうまく用例を抽出できなかった語として dül, duusan, duus, xožim は調査から除外した。

前節の表 8 の daguu に続きこの表 9 の turš はいずれも属格形を要求するもので、各種先行研究において高頻度で掲載される語である。

zuur「するときに」は zam「道」の主格形と組み合わさる例の他、先行する語が形動詞形の動詞である例が多い。動詞の形動詞形は後続の名詞を修飾する機能があることから、これは後置詞が動詞の形動詞形に主格形を要求しているのではないと考えられる。後述するようにここで扱う語の中には動詞が先行する例の多いものが含まれるが、その問題点については 3.5. で改めて述べる。

3.4. 数量の後置詞の再分類

数量の後置詞を次の表 10 で再分類する。

表 10. 数量の後置詞の再分類

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格	udaa	garuj, šaxam, šaxuu, orčim, ergem, bolgon, bür, tutam, tusam, boltol, xürtel, gexed	
主/属格		tušaa	
奪格			ilüü

※出現頻度の低いもの、コーパスからうまく用例を抽出できなかった語として negbür, tultal, zereg は調査から除外した。

数量の後置詞に属するものは分類上、主格を要求するところに集中する。1 つの理由は、とくに boltol, xürtel, gexed が主格名詞を支配する動詞に由来することである。その他の語は、もっぱら数詞が先行する garuj, šaxam, šaxuu, orčim, ergem やもっぱら「日」「夜」など循環する時間を表す語が先行する bolgon, bür, tutam, tusam「毎」のようにある程度決まった語との組み合わせでしか用いられないことが関係しているのかもしれない。

ところでこの中で garuj「あまり」, šaxam「近く」, bür「毎～」はいずれも先行研究で掲載される頻度の高い典型的な後置詞と認められる語である。これらは名詞に後続して用いられる語として頻出することは確かだが、文法的な意味を成すかという点で他とは大きくことなるように思われる。例えば garuj「あまり」という語が使用された文は、この語を欠いても文として成立する (6)。

(6) *urtdaa l 1 cag {garuj / ø } untdag bajna.*

urtdaa=l 1 cag {garuj / ø} unt-dag baj-na.

at.longest=EMP 1 hour over / ø to.be-HBT to.be-NPST

「長くとも 1 時間{あまり/ø}だけ寝ています」(‘garuj’を含む文は CEFR-Jx28-Mongolian)

先行研究で言われる「文法的意味」をどのように捉えるかの問題であるが、少なくともこの garuj という語や šaxam「近く」をはじめとした数詞をもっぱら取る数量の後置詞は、文中の成分同士の関係に関与しておらず、これらの語を欠いても直前の語 (ここでは 1 cag「1 時間」) の文中の役割は変わらない。これは、後置詞と呼ばれる他の語と大きく異なる特徴

である。(3) の B によればこれは助詞に分類されるべきである[19]。

なお、bür「毎～」や時間の後置詞 turš「の間ずっと」はこの点判断に迷う。例えば öglöö bür {morning every}「毎朝」は、bür を欠いても「朝」の意味で時間副詞として文中に残ることができるが、ödör bür {day every}「毎日」は bür を欠くと「日」の意味では文中の成分になりにくい。šön-ijn turš {night-GEN through}「一晩中」は turš (と先行する語の属格接辞) を欠いても šönö「夜」という副詞として文中に残り得そうだが、時間の長さを表す「一晩中」に対して šönö「夜」は文修飾成分として文頭に置かねばならないなどの語順の操作を要する。単独の時間副詞が文修飾成分になり、turš を伴う後置詞句が一般的な副詞的修飾表現として異なる役割を成すと考えると、欠くと文が成立しない後置詞であると見ることになる。この点、副詞的な文成分の役割に関するさらなる検討が必要である。

3.5. 理由と目的の後置詞の再分類

理由と目的の後置詞を再分類して表 11 に示す。

表 11. 理由と目的の後置詞の再分類

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格		boloxoor	
属格	tölöö, tul	tölöönöö, tuld, učraas, ulmaas	učir
奪格		bolž	

※出現頻度の低い xaraagaar は調査から除外した。

ここに含まれる語は単独で用いられない、必ず先行する語を必要とするという点で後置詞的であり、実際に多くの先行研究でも tölöö「のために」, tul, tuld「を目的に」を後置詞として取り上げている。učir は単独でも名詞として使用される。

しかしながら、理由「～なので」や目的「～するために」といった語釈からは、tul, tuld や učraas, boloxoor「なので」といった語が文と文を繋ぐ要素であり、接続詞と呼ぶべきなのではないかという疑問が生じる。実際に用例を見ると、いずれも動詞の形動詞形が先行する例が多い。他方で üün-ij {this-GEN}「この」や tijm「そんな」といった語も従えることや多くが属格を支配することなど他の後置詞に似た特徴も持っていることが分かる。2.1. で見た通り、モンゴル語学の伝統において後置詞が広い意味での接続詞 (xolbox üg) に分類されることがあるのは、こうした事情があるものと思われる。

3.6. その他の後置詞の再分類

その他の後置詞を再分類して次のページの表 12 に示す。

ここで注意を要する語として tuxaj, talaar「について」, yosoor「のとおりに」は先行するのが名詞であれば属格を取り、形動詞形の動詞ならば格接辞を取らない。

[19] ただし文法的な意味というよりも語意を派生する機能を有する点で、他の助詞と比類できるものかは分からない。この点、今後の課題としたい。

また bol はこれを後置詞として取り上げない先行研究が多い。これは 3.4. で見た成分同士の関係に関与しない、後置詞としての特徴を欠く要素だからであると考えられる。

šig については格接辞として扱う研究もある (ex. 文献 5)。

表 12. その他の後置詞の再分類

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格	met, šig, bol	bajtugaj, gex met	
主/属格	tuxaj	yosoor, talaar	
属格	činee	xuw'd	sacuu, esreg, öör
属/奪格			gadna
属/共同格			adil, adilxan, xamt
奪格		busad	öörgüj
造格			ül baram

※xir はコーパスからうまく用例を抽出できなかったために調査から除外した。

3.7. 小結

3.2.～3.6. の表 8～12 で見てきた後置詞の再分類を、次の表 13 にまとめる。

表 13. 後置詞と呼ばれる語の分類と特徴 (理由と目的の後置詞は除外)

	本来的後置詞	本来的派生後置詞	後置詞的用法
主格	不安定な n も出ない主格形を要求するものは、xürtel, boltol「まで」か、先行する語が限られた複合表現を成すもの (＜数量の後置詞)		
n/属格			不安定な n を要求する deer, door, dotor は文法化が進みつつある。
属格	典型的な後置詞？		属格その他さまざまな格を要求するのは位置・時間にかかる、位置語を中心とした副詞・形容詞などの語を転用したものである
その他さまざまな格			

表 13 から分かることとして、先行する格形式の観点から見ると「その他さまざまな格」が現れうるのは、いわゆる形容詞や副詞の「後置詞的用法」の場合に限られる。その中には位置の後置詞の例 (4), (5) で見たような、後置詞になったとは考えられない本来的な形容詞や副詞としての用法とみられるものも後置詞として扱われていることが分かる。

他方、先行する語が主格形で現れるとされる語には、欠いても文の成立を妨げないという点で他の後置詞を性質の異なるものが含まれる。

deer「上」, door「下」, dotor「中」という語は、本来の意味の希薄化が進み、単なる場所格に近い意味で使われるという点で文法化が進んでいると言える。しかしこれと同源の語を除けば、先行する語に属格形または不安定な n を取るという語は他にない。内容語が後置

詞になるという文法化の過程において、先行する語の取る格形式はあまり関与していないのかもしれない。

実際に、多くの先行研究が後置詞として取り上げる語、とくに本来的後置詞は先行する語に属格形を取るものが多く、むしろこれが典型的な後置詞と呼びうるものであると言える。

4. まとめと今後の課題

本稿では従来の先行研究で後置詞と呼ばれる語例を集め、これらに見られる特徴を記述し、典型的な後置詞がどのようなものか検討し、(7)〜(9)の事柄を明らかにした。

(7) 典型的な後置詞 : 後置詞としての用法しかないもの (格接辞を含むものは除外)、かつ属格支配 ※後置詞として取り上げられることの多いものに下線 (cf. 2.3.、以下同様)
derged「の傍らに、に付属して」, öödd「を伝って上へ」, uruu「を伝って下へ」, daguu「に基づいて、に沿って」, xaw'caa「近隣〔に〕、近所〔に〕」; turš「の間ずっと、に沿って」, turšid「沿って」; tušaa「〜のまわりに ; …位、約…」; tölöö「のために、のための、の代わりに」, tölöönöö「代わりに」, tul / tuld「を目的に」; tuxaj「について、についての」, činee「と同じくらい、と同じ大きさの」
このうち öödd「を伝って上へ」, uruu「を伝って下へ」は主格形を支配する用法もあり、格接辞との中間的な様相を見せる。

(8) 先行する語に主格形を取るものには、a. b. のように特殊なものが含まれる。
a. 先行する語が閉じたクラスや一部の語に限られるもの : daxin, tijš; 【数詞、数量】garuj, šaxam, šaxuu, orčim, ergem, 【循環する時間】bolgon, bür, 【動詞】tutam, tusam, zuur
b. 動詞の屈折形式由来のもの : boltol, xürtel, gexed, boloxoor, bajtugaj, gex met
c. met「のように、のような」, šig「…のように (な)、…の如き (く)」 は本来的な後置詞であり先行する語も限らないので、a. b. に比して典型的な後置詞に近い。

(9) 属格や主格ではない格形式として、奪格や与位格、共同格を要求するとされる語は後置詞的な用法で用いられる副詞や形動詞に限られる。これらは後置詞として格形式を要求しているというよりは、もとの副詞や形容詞として項を取っていると見るべきである。この点で、こうした語を後置詞であると呼ぶ蓋然性は低い。

本稿では論じることができなかったが、今後の展望として日本語を含むアルタイ諸言語の後置詞対応表現について形式、表す意味といった観点から対照研究を行うことも意義があると考える。例えば日本語の複合助詞は本稿で論じてきたモンゴル語の後置詞と似た意味・機能を有するが、その構造には異なりがある。風間 (2022) は場所表現に限った研究であるが、アルタイ諸言語や日本語などを見渡して後置詞を含む表現の名詞的性質を論じている。風間 (2022: 129) が指摘するように日本語では場所を示す語の名詞的性質が強く、文中では場所を表す「に」「で」などの格助詞を場所を示す語に付す必要がある。モンゴル語の場所を示す語、位置語の一連の語はむしろ場所を表す格である方向格や与位格を付すこ

とができず、そのままの形で修飾語になることができる。こうした検討のための前提として本稿の分析は有用であると考えるが、実際の対照研究は今後の課題としたい。

この他、後置詞と接続詞の異同、後置詞自体の屈折の有無、不変化詞という上位範疇についてのさらなる検討も今後の課題として残す。

略号一覧 (Leipzig Grossing Rules に掲載のないもののみ)

DAT : dataive-locative 与位格　HBT : habitual 習慣相　SIM : simultaneous 同時
EMP : emphasis 強調　n : unstable n 不安定な n (注 6 を参照のこと)

参考文献

Bat-Ireedüj, Ž. (ed.) (2014) *Mongol xel šinžlelijn tajlbar tol' bičig*. MUIS press xewlelijn gazar.

風間伸次郎 (2022)「アルタイ諸言語の場所表現における名詞的性格について」『日本語の類型』東京: 三省堂. pp. 129-160. [初出: (2019)『北方言語研究』9. pp41-65.]

kele bičig sudulqu gajar (2005) : öbür mongɢul-un yeke surɢaɢuli-yin mongɢul sudulul-un degedü surɢaɢuli-yin mongɢul kele bičig sudulqu ɢajar. (2005) を見よ

Kullmann, Rita and D. Tserenpil (2015) *Mongolian Grammar* (5th revised edition). Kullnom Verlag.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By.* Chicago and London: The University of Chicago Press.

Luwsanwandan, Š. (ed.) (1966) *Orčin Cagijn Mongol Xel Züi.* Šinžlex uxaany akadyemi xel zoxiolyn xüree / Ulsyn xewlelijn xereg erxlex xoroo.

『モンゴル語詳解辞典』(アプリ版) : *Mongol xelnij ix tajlbar tol'* (app version).

向井晋一 (2006)『東京外国語大学言語モジュール　モンゴル語　文法モジュール』 https://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/mn /　2025/12/22 最終閲覧

öbür mongɢul-un yeke surɢaɢuli-yin moŋɢul sudulul-un degedü surɢaɢuli-yin mongɢul kele bičig sudulqu ɢajar (2005) *odu üy_e-yin mongɢul kele*. öbür mongɢul-un arad-un keblel-ün qoriy_a.

小沢重男 (2000)『現代モンゴル語辞典』改訂増補版. 東京: 大学書林.

清格尔泰 (1991)『蒙古语语法』内蒙古出版社.

sečen ba bolu (eds.) (1996) *kelen-u sinjilel-un ner_e tomiyan-u tayilburi toli*. öbür mongɢul-un surɢan kümüjil-ün keblel-ün qoriy_a.

塩谷茂樹 (2007)『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』大阪外国語大学.

梅谷博之 (2010)「モンゴル語の『後置詞』の特徴」『日本言語学会第 141 回大会予稿集』pp230-235.

yuwan čou ba ɢalsang. (eds.) (2012) *mongɢul kele sinjilel-ün yeke toli*. liyouning ündüsüten-ü keblel-un qoriy_a.

Zeenyambuu, Č. ba M. Bazarragčaa (2014) *Xelšinžlelijn ner tom'yoony tajlbar tol'*. UB Bit press.

例文 (1) の出典 モンゴル文学総合サイト biirbeh.mn
https://www.biirbeh.mn/index.php?sel=content&cat_id=3&obj_id=2562　2025/12/12 最終閲覧

On Mongolian Postpositions

Yohei YAMADA
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Khalkha Mongolian, postpositions, particles, corpus, grammaticalization

This study provides a descriptive analysis of a group of words commonly referred to as postpositions in Mongolian.

Although postpositions have been frequently mentioned in previous studies, their definition has not been rigorously established, and there has been insufficient discussion of how far the category of postpositions should extend, despite the many features shared among the relevant forms.

In this paper, I first examine the characteristics of 100 lexical items that have been treated as postpositions in earlier research and evaluate the extent to which they exhibit properties typically associated with postpositions.

The analysis shows that many Mongolian postpositions are derived from words that can also be used independently in an adverbial function, and that relatively few items are restricted exclusively to postpositional use. In addition, some of these forms show limited productivity. These findings suggest that the category of Mongolian postpositions is not uniform and that it is difficult to treat all of these forms as postpositions in the same sense.

（やまだ・ようへい　yamadabayar@tufs.ac.jp）